

パネルディスカッション 「IPCSAと考える、これからの日本の農業」

モデレーター

- ・ 三輪 泰史 (株)日本総合研究所創発戦略センター チーフスペシャリスト

パネリスト

- ・ 浅井 雄一郎 (株)浅井農園 代表取締役
- ・ 鈴木 貴博 (株)鈴生 代表取締役社長
- ・ 平 勇人 (株)ファームノートデーリプラットフォーム 代表取締役
- ・ 内藤 祥平 (株)日本農業 代表取締役CEO
- ・ 後藤 一寿 (国研)農業・食品産業技術総合研究機構

パネルディスカッションの流れ

- 1 | パネルディスカッション趣旨説明**
パネリストのご紹介・趣旨のご説明
- 2 | IPCSA プラットフォームの活動状況ご説明**
パネリストの担当する営農類型毎にこれまでの活動状況をご説明
- 3 | 世界のトレンドを踏まえた日本の農業の現状・課題**
基調講演の内容を踏まえ、日本農業の現状と課題をパネリストと議論
- 4 | これからの日本の農業の未来に向けてIPCSAができること**
今後IPCSAが取り組むべきこと/会員とやりたいことを議論
- 5 | 質疑応答**
会場の皆様から、パネリストに向けた質疑応答
- 6 | 総括**
パネルディスカッションの総括



株式会社 日本総合研究所

三輪 泰史

2004年に日本総合研究所へ入社。農業再生による地域活性化、IoTやAI等を活用した先進農業技術の事業化等に精通しているほか、各種調査研究を通して、スマート農業に関して幅広い知識を有する有識者。

食料・農業・農村政策審議会委員（農林水産省）や戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）推進委員会サブPD（内閣府）等を歴任。



株式会社 浅井農園

浅井 雄一郎

明治40年創業から約120年の歴史を持つ浅井農園の代表。大規模ハウスにロボット技術を取り入れてトマト栽培を行うなど先進的な取組に注力。

「常に現場を科学する研究開発型の農業カンパニー」を目指す。



株式会社 鈴生

鈴木 貴博

2008年に株式会社鈴生を設立。静岡県を中心に露地野菜等を生産し、モスバーガーなど企業からの出資を受けた8社からなるグループを管理。

スマート農業技術の導入だけでなく、JGAP団体認証の取得や、農業機械シェア及び作業受託等の農業コントラクター事業にも取り組む。

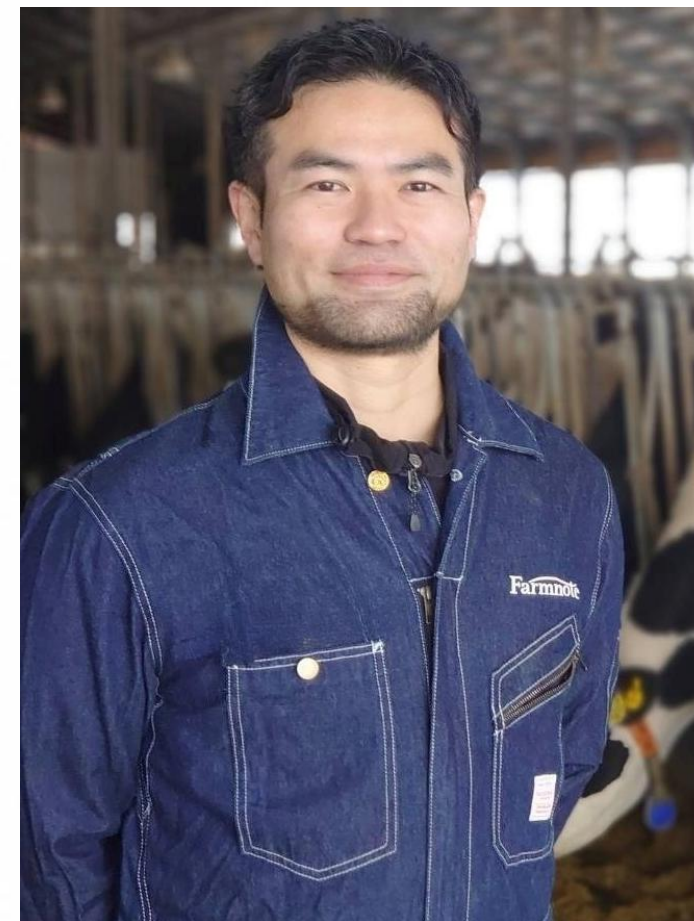
2025年にポッカサッポロ社・西本Wismettac社と(株)LEMONITYを設立。果樹生産にも取り組んでいる。



株式会社 ファームノート デーリィプラットフォーム 平 勇人

岐阜大学農学部獣医学科を卒業後、岐阜県畜産研究所に務め、その後、愛知県岡崎市にて酪農を中心とした家畜診療に従事。

2017年に株式会社 ファームノートに入社し、獣医師目線でのプロダクト開発に従事。IoT・AI等のデジタル技術と酪農生産技術を組み合わせて、酪農生産のDX化を目指す。



株式会社 日本農業

内藤 祥平

2016年に(株)日本農業を設立。国内6拠点、国外7拠点でりんごを中心に運営し、海外式の栽培方法（高密度栽培）を導入。

生産から販売までを一気通貫で行う「儲かる農業」を目指す。2023年には、日本産農作物の輸出額が25億円を突破。



国立研究開発法人 農業・ 食品産業技術総合研究機構 後藤 一寿

農業経営学やマーケティングサイエンスを専門とし、オープンイノベーションを活用したフードビジネスの展開や地域振興方策の研究に取り組む。2018年にオランダ・ワーヘニンゲン大学に設立された農研機構欧州拠点の初代駐在員として多数の国際共同研究を推進し、2023年10月に帰国。現在は農研機構本部NARO開発戦略センター副センター長として、農研機構の国際戦略の立案や国際共同研究を企画、リードしている。



PF	進行役	主な議論の様子
水田作	 佐藤 拓郎 (株)アグリーンハート 代表取締役	水田作の将来像を踏まえ、 スマ農技術を有効活用して規模拡大 している農業者の事例発表を通じて、 規模の大小 に分けて 経営課題と地域課題 への対応を議論
畑作	 三浦 尚史 (株)三浦農場 代表取締役	平場・中山間などに応じた 先進技術 （GNSSオートガイダンス等）の 導入可能性 や 土壌データ・分析等 を有効活用したスマート農業の展開
露地野菜・花き作	 鈴木 貴博 (株)鈴生 代表取締役	各品目に共通した重要課題である 出荷・流通におけるデータの活用・DX化 、スマ農技術を活用した 株間除草の省力化 について議論
施設野菜・花き作	 浅井 雄一郎 (株)浅井農園 代表取締役	生成AIやロボットなど 異分野の先端技術の開発・実用化 の状況を踏まえ、 施設栽培での活用可能性 （優良経営モデルの検討）について議論
果樹・茶作	 内藤 祥平 (株)日本農業 代表取締役CEO	各リンゴ産地の先進事例 を通じて、スマ農技術の導入効果の向上につながる 省力樹形（高密植栽培等）の有効性 を議論
畜産・酪農	 平 勇人 (株)ファームノート デーリープラットフォーム 代表取締役	畜種ごとの 経営・飼養管理におけるデータ収集・分析・活用方法 における課題と対応について、 畜種を超えた視点 で議論

施設野菜・花き作プラットフォーム - 活動状況

IPCSA HPにて
議事概要公開中！



IPCSA
スマート農業イノベーション推進会議
Innovation Promotion Conference for Smart Agriculture

AI・ロボティクス等の活用を見据えた、施設栽培の次世代生産システムのあり方を議論

座長



浅井 雄一郎

(株)浅井農園 代表取締役

アジェンダ

- 第1回
・ スマート農業技術活用に向けた共通課題の整理・把握
・ 共通課題への対応に向けた意見交換
- 第2回
・ 異分野・農業分野における生成AIの活用事例紹介
・ 農業現場における生成AIの活用ニーズ・課題・対応策
- 第3回
・ 農業現場におけるロボット技術の活用ニーズ・課題
・ 農業現場におけるAI・ロボティクスの有効活用の検討

参加者

AGRIST、浅井農園、エフ・エフ・ヒライデ、果実堂、きゅうりトマトなすび、
JA西三河きゅうり部会、JAひまわりスプレーマム部会、
東京大学次世代知能科学研究センター/大学院情報理工学系研究科/農学部、
トクイテン、トロン、マイクロソフト、宮城フラワーパートナーズ

主な議論ポイント

最適な環境制御モデルと栽培体系への生成AI導入

- ・ 固定費比率の高い施設園芸では、いかにして**インプットを最小化し、アウトプットを最大化させる**かが重要
- ・ 既存施設にも適用可能な技術を現場実態を踏まえて導入しつつ、**AIを活用した栽培知見の共有**も進めていく必要がある

生成AIが切り拓く農業分野の未来

- ・ 生成AIは栽培・出荷・経営判断やオフィス業務まで幅広い活用が今後期待されている。現時点では、**出荷量予測や価格予測、需給調整の自動化に活用余地**がある
- ・ 今後のAI普及に向け、栽培データの蓄積不足、利用者のリテラシー格差、自動化範囲や責任分担の制度設計等が課題

未来から逆算して考える、ロボット活用への道筋

- ・ ロボット導入を進めるには、**農業現場や出荷規格の標準化・規格化**を進めることが必要
- ・ 現場データの蓄積と作物毎の成功事例の横展開を図り、将来の農業構造を見据えた**技術開発、人材育成、データ基盤整備**を一体的に進めることが重要



露地栽培における作業省力化に向けた、スマート農業技術のあり方を議論

座長



鈴木 貴博

(株)鈴生 代表取締役

アジェンダ

- 第1回
- ・スマート農業技術の費用対効果に関する課題の整理
 - ・有用な技術・開発必要なスマート農業技術の検討

- 第2回
- ・農産物流通DXに係る取組紹介
 - ・農産物の出荷・流通の最適化に向けた課題・対応策

- 第3回
- ～近日実施予定～
(株間除草の省力化に向けた課題と対応)

参加者

エーアンドエス、kikitori、鹿追町農業協同組合、新福青果、
鈴生、セラク、トップリバーアカデミー、
農研機構 野菜花き研究部門、吉野家ファーム福島、
流通経済研究所

主な議論ポイント

露地栽培におけるスマート農業の可能性

- ・スマート農業技術は、機械と人手の分業を見極め、オペレーターの技能に過度に依存しない形で導入を進めることが重要
- ・特に、**株間除草は多くの労働時間を要する**ため、その自動化が省力化と費用対効果の向上において重要
- ・日本の圃場条件・中山間地の実情に合う小型機械の開発等、現場作業実態を踏まえた技術開発・普及が求められている

農産物流通の高度化に向けたDX基盤整備とデータ連携

- ・自動収穫機を導入し、収穫効率を最大化するためには、鉄コンテナの活用など**出荷方法の変換**に加え、それに合わせた**流通面での対応**が必須。
- ・FAX・紙伝票が残る流通現場でDX基盤を整備し、生産から流通までの**サプライチェーン全体のデータ連携**を進める必要がある
- ・**データ規格の統一によって関係者間の相互連携を可能にすることが、農産物流通の効率化と安定供給に重要**



畜産・酪農におけるデータ利活用・スマート農業技術導入に向けた課題を議論

座長



平 勇人

(株)ファームノートデーリープラットフォーム 代表取締役

アジェンダ

- 第1回
・ スマート農業技術活用に向けた共通課題の整理・把握
・ 共通課題への対応に向けた意見交換
- 第2回
・ 畜産・酪農におけるスマート農業技術の全体像
・ 技術の普及における課題の詳細協議
(異分野で活用されている製品・技術の畜産分野への応用等)
- 第3回
・ ファームノートデーリープラットフォーム現地視察
・ 畜産・酪農におけるデータ利活用への課題・対応策

参加者

ARAV、ヴィクトリーポーク、熊本興畜、伍協牧場、
ファームノートデーリープラットフォーム、
北海道大学農学研究院畜牧体系学研究室、mosir 小林牧場
ヤマニファーム

主な議論ポイント

畜種横断で進める畜産DXと技術導入の課題

- ・ 家族経営が多いため、**低コストで手軽に導入しやすいスマート農業技術**の整備が必要
- ・ 畜種に応じた違いを理解しつつ、**畜種間で技術や知見を共有**し、参考としていく姿勢が重要
- ・ **費用対効果に基づく投資判断に資する情報**の共有が重要

畜産経営の課題に対応したスマート農業技術の導入

- ・ 家畜の行動監視技術やAI解析等のスマート農業技術が、疾病の早期発見、省力化、管理精度向上等に効果を発揮している
- ・ 技術導入による経営改善に向けて、地域や畜種ごとの条件に応じた運用を意識し、**既存経営に馴染む段階的な導入**が重要

データ活用による畜産・酪農経営の効率化

- ・ **AI・IoT等を活用してデータを可視化**し、少人数でも高い生産性と迅速な経営判断を実現する取組が進んでいる
- ・ 業界として、必要なデータが分散し、形式も統一されていない実態があるため、**データの一元管理、共通基盤整備**をおこなっていくことが重要



スマート農業技術の効果を引き出すリンゴ省力樹形・高密植栽培の普及に向けた議論

座長



内藤 祥平

(株)日本農業 代表取締役CEO

アジェンダ

- 第1回**
 - スマート農業技術活用に向けた共通課題の整理・把握
 - 共通課題への対応に向けた意見交換
- 第2回**
 - りんご省力樹形・高密植栽培等の生産方式転換
 - スマート農業技術導入による省力化への課題・対応策
- 第3回**
 - りんご省力樹形・高密植栽培の有効性・現場課題共有
 - りんご省力樹形・高密植栽培の普及への課題・対応策

参加者

青森県産業技術センターりんご研究所、青森県農林水産部、アグベル、黒田みかん農園、JA全農長野、世羅幸水農園、仙台ターミナルビル、日本農業、農研機構果樹茶業研究部門、北海道立総合研究機構農業研究本部、もりやま園、ヤンマーホールディングス

主な議論ポイント

果樹栽培におけるスマート農業技術導入の方向性

- スマート農業技術は万能策ではなく、人の判断が必要な工程を見極めた上で、収穫・摘果など**労働負荷が高く省力効果の大きい作業を中心に導入**を進めることが必要
- 不足する加工向けに特化したスマート農業技術**について、加工業者を巻き込んだ議論が必要

りんご栽培の省力化に向けた栽培方式の変換

- 労働者減少への対応として、省力化・生産性向上を実現するため、**省力樹形・高密植栽培等の機械導入を前提とした園地設計**を進める必要がある
- 高密植栽培は単なる栽培技術に留まらず、**樹形が標準化され、均一な栽培環境が実現**することで、スマート農業技術との親和性が高まる

省力樹形・高密植栽培の普及に向けた今後の論点

- 普及に向けては**耐雪性や栽培手法等の「技術的課題」**がある一方、栽培技術の導入に伴う負担・リスクを誰がどのように支えるかといった**制度・仕組み上の「システム課題」**もあり、両面からの議論が必要